

此事はわかりきつた事であるが、社會の空氣が
そうなつて居ないから、理屈では承知しながら、

自然反對なやり方をする事があると思ふから殊更
取り出して云つたのである。

學齡前兒童の發達と教養

文學士 入澤 宗壽

兒童の研究は晩近に於て非常に進歩した。殊に
幼兒の研究は割合に早くから手をつけられて、精
神上の發達について詳細なる記述も夙にあらはれ

出來て居ると思はれるので、その前半即ち六歳以
下の兒童に關する所を簡單に紹介し併せて教養上
の注意と批評とを加へて見やうと思ふ。

一、兒童の發達段階

て居るが、或は單に綿密な記述といふに止まり、
或は個々の能力の發達の記載であつて、綜合的に
個性の發達を叙述したものが甚だ少ないのは教育
とか保育とかの方面に取つては憾み無き能はずで
ある。然るに近時米國の兒童心理學者カークバト
リック氏は「個性の育成—兒童發達の主觀的見解」
といふ書に於て個性の發達を綜合的に見主觀的に
見て、其の發達段階の區分も從來のとは多少面目
を異にして居つて甚だ教育的見地から見てうまく

カークバトリック氏も云つてゐる如く、教育者の
立場からすれば何よりも兒童の發達段階を知るこ
とが必要である。何れの段階にあるかを知つて教
養を施すでなければ有効で無いばかりで無く、時
に害をも生ずる。尤も吾々から見れば、兒童の現
在に捉はれて、それを上の段階に導き上げるとい
ふ事を忘れるのは避く可きであるが、その發達程

度を始終考慮に入れて取扱はなければ、決して有効なる教養の結果は擧つて來ない。叱つても何の事か分らない時期の幼兒を折檻する母親を能く見受ける毎に吾々は彼等に少くとも一般的理解を與へてやりたいと思はざるを得ぬのである。かくの如くにして發達段階の知識は保育者教育者に取つて何よりも大切なる事柄である。これ吾々のカークバトリック氏に聞かんとする所である。

而して從來の發達段階の區分は前にも述べた如く教育的でなかつた。といふは、單に身體の發達から特に身長率から區別したり又は精神上知力から又は感情意志のみから區分したり又は系統發生即ち今日迄の人類の發達との平行から區別したものであつた。これらもその一部面に於ては參考になるけれども、教育者に手つ取り早く役立つものは是等を綜合したものでなければならぬ。斯くて心身上の著名なる新活動の表はれを以て區別する事が生じたのであるが、カークバトリック氏は特

に人が他の動物と異なる所以の點即ち社會的衝動と社會的影響の點から區別して居る。これは精神上にしかも亦この一部分に偏して居るやうにも思はれるが、吾々に取つては進んだやり方のやうに考へられる。身體の發達による階段とその研究とは從來醫家に依つて可成、完全の域に進んで居る。

吾々の求める點は精神上的の綜合的見解であつて而して又社會的個人として社會に順應して個性を發展して行く方面の見方である。カークバトリック氏は茲に着眼して次の如き分類を主張して居る。

第一期は生後滿一箇年迄で氏はこれを前社會時代といつて居る。此の時代に於ては事物及び人間について全く客觀的に影響されるのみで、人間の思想及び感情については影響を受けないといふのを以て斯く呼んで居る。**第二期**は二歳から三歳の終りまで、カ氏はこれを模倣及び社會化の時代と呼んで居る。この二年間に於て兒童は漸次精神的影響を受け入れるやうになり、兒童の精神状態は

多くの點に於て其の周圍の人間から決定せられるといふのである。第三期は個性化の時代と呼んで居つて四歳の始めから六歳迄である。此の時期に於ては、前の時期に發達した人格が一層明らかに個性的となり、他人の特性を單に取り入れるので無いといふので斯く命名して居る。第四期以下は學齡以後で茲に述べない所であるが、彼は此の六歳から十二歳迄を競争的社會化の時期と呼び、それから十八歳迄を第五期の青春期又は過渡期と呼び、第六期、十九歳から二十四歳までを青年後期と呼んで居る。かくして此の時期の區分は大體に於て一般の身心の發達から區分するものと一致して居るが、彼の見地が目新しく注意に値して居る。以下彼が第一期から第三期迄の叙述を述べて見やうと思ふ。

二、前社會時代(滿一歳まで)

此の時期の特質。此の時期は身體上及び精神上

急激な發達をなす時代であるが、社會的影響は此の後の時期に比べると殆んど働がないといつてもいゝ程僅かである。兒童には凡ての高等なる動物と同じく反射的及び本能的傾向が先づ現はれる。併し其の多數のものは或時期の間は現はれないで、動物よりも一層多く模倣的傾向が盛である。

動物と同じく事物や人間の行動の刺激に反應するが、併し動物よりは多少多くの精神上の刺激を受ける。人間の顔面の表情や音聲の調子が先づ兒童に刺激を與へて、兒童は先づ微笑の模倣をやる。

これは本能よりも經驗の結果に本づくもので、微笑の如き精神状態の表はれが、兒童の顔面の運動を起してそれが同様な精神状態を兒童の心中に起すやうに導く。かくして此の後一層直接に他人の精神状態に動かされるやうになるのである。

併しながら、これら意識的生活は此の時期の兒童の發達に著しき影響を起すものでは無く、この時代に於ては事物及び人間から與へられる感覺上

の刺戟が主なる影響を與へるに過ぎない。この期の兒童の精神生活は主として此の種の刺戟を受けて反應する事によつて發達するので物理的環境には敏活であるが、精神的環境にはそうでない、かくして此の期間は他人の精神よりも事物の方が大なる影響を與へる唯一の時期で、これ以後は、精神上の影響を受けることが大になつてくる。

此の期間中に起る變化。此の時期中即ち滿一ヶ年間に兒童の身體の大きさは殆んど三倍にもなるので、かゝる成長の比例は此の後の時期には見出されない所である。これは身體上のみでなく、精神上に於ても然りて即ち殆んど精神生活を有せない様な状態から、知性に於て高等動物をも凌駕する域にまで達し、二三の反射的本能的運動をするに過ぎない状態から一躍して手と音聲とを支配し得るに至るのである。

この一年間に於て兒童は欲するものをつかむことが出來、匍ふことが出來、物に捉まつて歩く

事さへも出來るやうになる。この筋肉の共同調和は又精神の共同調和にも同様の變化を來たして、茲に兒童の感覺的及び其の他の精神状態はもはや孤立したもので無く、連結せられ、有機的に統合せられ、意識は無意味の混沌状態でなく、各感覺が各意義を有する連關せる全體となるのである。又この期の終りに好奇心や驚愕も起り、又色々の表情を模倣し、新しき運動と音聲とを真似るに至つて人間の特性を急に獲得して來るのである。

此の時期の取扱方。かゝる急激なる發達、著しき生理的變化の時期に於て最も注意を要するのは兒童の健康である。統計の示すこの一年間の死亡率が非常に大であることは、ます／＼茲に意を深うせしめるものである。かくして身體上の注意が此の期に最も顧られなければならぬのであるが、その中でも食物の注意が最も肝要で乳兒期として母の食物が最も注意せられねばならない。衣服、空氣運動等は此の期に於てたゞ第二位に來る問題

である。

兒童の生理的發達が周圍の好都合と好食料と休息と睡眠で規整されると同時に客觀事物の刺戟の種類と數と秩序とも整理せられなければならぬ。刺戟の變化が強きに過ぎ又急激に過ぎれば、兒童を疲勞させ神經質にし、事物の眞の性質を發見する餘裕を與へない。兒童は刺戟を受けなければならぬが限界がある。併し此の限界に於て凡ての色と凡ての形を具へた物に依り。又は色々の音や事物で感官を練習する機會を與へねばならぬ。兒童は是等の事物を色々に取扱ふ力を持つて居て、これが兒童をして他の動物より優れた自由の觀念を形成せしめるのである。故にこの期に於て兒童精神の發達は、多様のものに接する機會を多くしなければならぬ。

又此の期から善良なる習慣を與へるやうにせねばならぬ。犬や猫を或る種の躑に慣らす如くに、兒童も同様の方法により躑をなす可きであつて、

然らずんば家庭の暴君となつて仕舞ふ。固より此の期間には善惡を意識しないけれども、次の時期に於て意識的生活に又彼の性格に影響を及ぼす様の事はこの時期中に習慣をつけねばならぬ。かくて兒童はこの期間に精神的のものとしては影響を受けなくとも周圍の人によつて或習慣をつけるやうに導かれるのである。

如上はカークバトリック氏が第一期に於ける教養の方針である。身體上に於ける非常なる注意の必要は何人も異論のない所であらう。感官練習の注意も亦正當で、その必要は多くの教育家が夙に説いた所である。フレーベルは嬰兒が横臥して居る所に球をつるして置けといひ、ヘルバルトは色々の形のを吊るせよといつて居る。視覺の發達と觸覺の發達は實にこの期に伴つて起るもので兒童は引出しを明けたり締めたり棒を穴に附き込んだりする。本能的に是等の活動は感官の練習をやる。これにカ氏の所謂機會と材料とを與へれば

満一年頃の兒童に立派な觸覺練習が出来る。否自らやりつゝあるのである。これを系統立てるのは固より結構であるが、知識教育の準備として學齡を超えた兒童に初歩的觸覺練習をやるモンテッソリ式心酔者には感服が出来ない。正常の兒童では一歳前後から自らやつて居る。その時にこれを導かねばならない。痴兒教育でこそ成長した者をつかへまで感官の練習から始めなければならぬ。小學校に於て初歩的觸覺練習をやるとは以ての外である。これは一歳頃からの注意で澤山である。最もこれは知育の準備としての教育についてであつて技藝的堪能の教育は固より別である。かくして吾人はこの第一期に於て感官の練習に機會を與

『ジエーン・アイア』(三)

|| 英文學にあらはれたる子供(十四) ||

東京女子高等師範學校教授 岡田みづ

次にジエーンの記憶に印して居る事は、恐い夢

て導いて行くことの必要を唱ふるものである。次に躑なり習慣を與へる事については自由主義者否放任主義者は大に反對するであらう。併しなからこれも決して無理なことでは無い。ルッソオでさへも自然的の欲望と想像的の欲望とは區別して後者は幼時から許すなといつて居る。幼時に放任して急に矯正しやうとするのは大人の矛盾である。とロックはいつて居る。固より發達段階を考慮に入れて無理な注文をしてはならないが、身體的の習慣は實にこの第一時期にも可能であつて、教養保育の任に當るものは此の時代から相應して善良なる躑けを與へる事を忘れてはならない。

を見たとの感じで目が覺めたのと、目の前の赤い